渡名喜島方言の助詞について
－とりたて助詞、終助詞、引用の助詞－

高江洲　頼　子

要　約

渡名喜島は那覇の北西約58kmの海上にあり、周囲12.5kmの小島である。そこで話されてきた方言は、琉球方言のなかの北琉球方言（奄美・沖縄方言群）に属し、さらにその下位の沖縄中南部方言に位置づけられる。

本稿は渡名喜島方言のとりたて助詞（ja, N, ju:ka, baka:i, co:N, du, ga）、終助詞（jo(:), do:, sa, qsa:, ja(:), de, te(:), muN, hja:, gaja(:), cisa, ga, na）、引用の助詞（ci, cici）についての報告である。琉球方言の助詞の研究は、格助詞については報告がいくつかみられるが、本稿でとりあげるとりたて助詞、終助詞、引用の助詞についてはまだ研究がすすんでいない。ここでは、渡名喜島方言のそれらの助詞について、できるだけ詳しく用例をあげて記述する。とりたての形のあり方、音声的な融合のしかたも含めて、文法的な意味・機能があきらかになるよう記述する。

キーワード：渡名喜島方言、助詞、格助詞、とりたて助詞、係り助詞

1. とりたて

名詞は格助詞をつけることによって文法的な意味をあらわす[1]。さらに、格助詞のうしろにとりたて助詞をつけることによって、提示、強調、つけくわえ、限定などの意味をあらわし、他の同類のものからとりたてる。渡名喜島方言には、ja, N, ju:ka, baka:i, co:N, du, ga, 7個のとりたて助詞が確認できた。

琉球方言には、古代語の係り結びの用法がひろく残っているが、渡名喜島方言にもおなじように残っていて、du（ぞ）, ga（か）が述語に特定の形を要求する。

1. 1　jaのとりたて

jaは同類のものとの対比においてとりたてて提示、強調するはたらきをする。標準語の「は」に対応する形である。それぞれの格助詞にjaをつけてとりたての形をつくる。

標準語の「は」をつけたとりたての形は、「のは、には、からは」のように、それぞれ格助詞に「は」をつけてつくり、渡名喜島方言も基本的に同じである。しかし、標準語の「が格」をとりたてるばあいは、名詞に直接「は」をつけてあらわされ、「はだか格」や「を格」のとりたての形とホモニムになる。標準語の「が格」に相当する渡名喜島方言のga格, nu格はjaをつけてとりたてるとき、ga, nuはとりはずされることなく、後ろにそのままくっつけられ、gaja「がは」、no:（＜nuja）「がは」となる。この現象は琉球方言に広くみられるきわだった現象である。[2]

首里方言では、とりたて助詞jaがつくとき、まえの母音によって音声的に融合した形がもちいられるが、渡名喜島方言では融合しない形でも、融合した形でも、どちらでもあらわれる。

i + ja ⇒ [ija]/[e:]
cu:ja bucige:nu hu:zi: jakutu sikucija jami:N.
（きょうは貧血のようだから、仕事はやめる。）
?unu sikuce: mikuminu ?aN.（その仕事は見込みがある。）

a + ja ⇒ [aja]/[a:]
ku:gusui nudakutu wataja no:taN.（粉薬を飲んだから、お腹は治った。）
taka:ja cikara: ne:Ndo:.（のっぽは力はないよ。）

u + ja ⇒ [uja]/[o:]
cikaguruja ta:zikuiN hiki?a:raN.（近頃は田作りも甲斐がない。）
zira:ja cikaguro: miciraniN mi:ranSiga tabikaiga Nzara.
（次郎は近頃は姿も見えないが、旅にでもいったのだろうか。）

以下、いちいちの格助詞について用例をあげて記述する。

(1) はだか格
とりたての形は ja である。標準語の「は」に対応する。
?uto: tatiraN gutu si takabisja: sjuN.（音は立てないようにして、爪先立ちをする。）
turihizui jakutu kiNja ?o:ku kirijo:.（底冷えだから、着物は多く着なさいよ。）

(2) ga 格
標準語では「が格」のとりたての形は「は」であるが、渡名喜島方言では、とりたての形は gaja（がは）である。音声的に融合した ga: の形でももちいられる。能力をあらわす文の主語につくばあい、標準語では「には」と訳することが可能である。述語が否定形であらわれることが多い。
?ariga: c'uja matumi:u:saN.（彼(ガ)は／彼には人はまとめられない。）
kunu sikuce: buku:ga: naraN.（この仕事は不器用(ガ)は／不器用にはできない。）
maqsi:gu:ga: ?akine:ja naraN.（正直者(ガ)は／正直者には商売はできない。）
sikuci Ncakutu mi:?uzi: si wa:gaja naraN.（仕事を見たら怖気づいて、私(ガ)はできない。）
?anu N̥ne: wa:ga: mi:raN.（あの船は私(ガ)は／私には見えない。）

(3) nu 格
nuja の形が音声的に融合して no:（がは）となる。標準語の「は」に対応する。
ga 格のばあいと同様に述語が否定形であらわれることが多い。
kizimuNno: ti:ja:ci:ja: ?uturusimuN.（木の精(ガ)は蛸はこわいものだ。）
?unu mi:sarimuNno: nama se:ne:Njo.（その怠け者(ガ)はまだしていないよ。）
mucikasi: so:daNja muN?i:bitano: naraN.（難しい相談は口下手(ガ)はできない。）
ke:te: wa:muno: taka?ataidu sjuru.（かえって私のもの(ガ)は高あたり(ゾ)する。）
?unu jaNme:no: no:raN.（その病気(ガ)は治らない。）

(4) ni 格

nija の形が音声的に融合して ne: となる。標準語の「には」に対応する。

magimurane: muragaqko:nu ʔatan. (大きい村には村学校があった。)
sjo:gwacine: hukurukuzunu 'i: kazain. (正月には福禄寿の絵を飾る。)
ʔamihuine: nzunu husagain. (雨降りには溝がふさがる。)
ʔja: hukane: gu:ja 'urani. (おまえのほかには仲間はいないか。)
ʔuminc'u:ne: miminukwa: kiritusiga ʔu:san. (漁師には鼓膜が切れているのが多い。)

(5) (n)kai 格

(n)kaija の形である。音声的に融合しない。標準語の「には」「へは」に対応する。

mukuja miqtani ja:kaija ku:n. (婿はめったに家には来ない。)
nanjo:kaija waqta:ga sakidacun. (南洋には私たちが先立つ。)
ʔiri:kazinu hucukutu na:hwankaija zinpu: jan. (西風が吹いているから、那覇へは順風だ。)
sizidaru ŋninkaija ta:ta:ga nututaga. (沈んだ舟には誰々が乗っていたか。)
wanunkaija mi:kusunu ʔuqsa kuti ʔatan. (私にはほんの少し、くれてあった。)
hinukankaija hiraʔuko: ʔusjagi:n. (火の神には平線香を供える。)

(6) kara 格

karaja の形が音声的に融合して kara: となる。標準語の「からは」、「は」(移り動く場所) に対応する。

k'wakara: cikikazini zinja cu:nna. (子どもからは月毎にお金は送られてくるか。)
ʔunu ʔizunkara: ninzu: mizi hain. (その泉からは年中水が流れる。)
sinamicikaraja taciba:ʔasizaja mukan. (砂道(カラ)は足高下駄は向かない。)
hakurunu sicikara: ʔacisan ja:racun. (白露の節からは暑さもやわらぐ。)
cu:kara: janme:ja mucino:in. (今日からは病気は持ち直す。)
jusandikara: ʔaritu ciga:in. (夕方からは彼と交代する。)
hama: waqta:kara: cikasan. (浜は私の家からは近い。)

(7) uti 格

utija の形が音声的に融合して ute: となる。標準語の「では」に対応する。

ʔo:sakaute: mi:k'wanu ja:nkai tumain. (大阪では甥の家に泊まる。)
nahaute: hakimun hakane: micin ʔaqkaran. (那覇では履物をはかねば道も歩けない。)
c'unu ja:ute: ninzigukucinu waqsan. (よその家では寝心地が悪い。)
ju:huruute: maruhadaka nati ʔami:n. (お風呂では丸裸になって浴びる。)
ʔwi:katanu me:ute: ci:hisjamanki kaki:n. (上役の前では正座をする。)

(8) si 格

sija の形が音声的に融合して se: となる。標準語の「では」に対応する。

ʔunnaginu na:se: cinagaisa. (その長さの縄ではつながるよ。)
muko:kazi nati hu:se: tu:saran. (向かい風になって帆では通せない。)
ʔanu daja:ga: du:cuise: naran. (あのだらしのない者(ガ)は一人ではできない。)
ʔunu ni:ja na: c'uhe:se: mutan. (その荷物は縄が一重ではもたない。)

(9)　tu 格

tuja の形である。音声的に融合した to: の形ももちいられる。標準語の「とは」に対応する。
c'u?use:imuNnuca:tuja ?e:tija naraN.（人を馬鹿にする者達とは相手はできない。）
?anu c'uto: hukasikunu maziwai sjuN.（あの人とは深い交わりをする。）
maja:nu cirato: 'inumuN juNgwika: ?uqcuN.（猫の顔とは同じで、汚れている。）
hanabasja:nu hanaja basjanaito: cigatuN.（花芭蕉の花はバナナとは違っている。）
?agunito: tuke: hizamituN.（粟国島とは海洋を隔てている。）

(10)　madi 格

madija の形が音声的に融合して made: となる。標準語の「までは」に対応する。
Nmakara ?amamade: maqto:ba:nu mici jaN.（そこからあそこまではまっすぐの道だ。）
?akacicimade: mikazicinu kakatuN.（明け方までは三日月がかかっている。）
namamade: mjakuja ?ucuN.（今までは脈は打っている。）

1．2　N のとりたて

標準語の「も」に対応する形である。＜つけくわえ＞、＜強調＞、＜ならべ＞の意味をあらわす。疑問詞につくばあいは全部のものを強調する。

(1)　はだか格

とりたての形は N である。標準語の「も」に対応する。

N でおわる単語をとりたてるばあい、語末の N を nu にかえてとりたて助詞 N をつけ、nuN の形になる。

mata ?acaN ku:wa.（またあしたも来なさい。）＜つけくわえ＞
?awaNde:nu zaqkukuN cikuiN.（粟などの雑穀も作る。）＜つけくわえ＞
dakibukinu ja:ja gozu:ninuN mucuN.（竹葺きの家は 50 年ももつ。）＜数量強調＞
mi:ja:N cikuti hukurasja sjuN.（新しい家も造ってうれしがる。）＜強調＞
janamuN de:nu tacihabakati ca:N naraN.（悪いやつらが立ちはばかってどうもならない。）＜強調＞
munuN siruN tacike:?irike: kwataN.（ご飯も汁も何度もおかわりして食べた。）＜ならべ＞
?ja: tanumiN kicusiga wa: tanumiN kike:.（お前の頼みも聞くが、私の頼みも聞け。）＜ならべ＞

(2)　ga 格

gaN の形である。標準語では「が格」にとりたて助詞「も」をつけてとりたてるときには、はだか格のとりたての形と同様に「も」になるが、渡名喜島方言では、他の中南部方言同様、gaN（がも）の形をとる。標準語に訳するとき、「でも」に対応するばあいがある。

saNda:ja hisazu:sanu ta:gaN kana:N.（三良は健脚で誰(ガ)もかなわない。）＜強調＞
kunu sikucija ta:gaN ta:gaN naiNcidu ?umuiNna.（この仕事は誰(ガ)もできると思うか。）＜強調＞

(3)　nu 格

nuN（がも），N（も）の形である。首里方言では nuN の形であらわれる。標準語の「も」に対応する。

kazinu ba:ba: si namiN tacuN.（風がブーブー吹いて波も立つ。）＜つけくわえ＞

mi:tuNda?o:e:ja ?iNnuN kwa:N.（夫婦喧嘩は犬(ガ)もくわない。）＜強調＞
taiwaNNmuja tusijuinuN ma:saN.（台湾芋は年寄り(ガ)もおいしい。）＜強調＞
Nzunu tatamati miziN hakaN.（溝がつまって、水も流れない。）＜強調＞
kaziN namiN ne:N nadajaqsa ?ataN.（風も波もなく、穏やかであった。）＜ならべ＞

(4) ni 格

niNの形である。標準語の「にも」に対応する。
da: waNniN c'uhuguija kure:.（どら、私にも一袋はくれ。）＜つけくわえ＞
simaniN taisjo:nu kuru macijanu ?ataN.（島にも大正の頃、店があった。）＜つけくわえ＞
kure: nu:nu hiziga jara ?ujaniN niraN.（この子は何の血統なのか、親にも似ない。）＜強調＞
?ikusaju:niN muqtainu k'wa: buzini sudacaN.（戦争時にも６人の子を無事に育てた。）＜強調＞
Nkasija ma:nu ja:niN zirunu ?ataN.（昔はどこの家にもいろりがあった。）＜強調＞
ciribai ?iri:ne: ca:ru te:huniN to:riraN.（筋交を取り付けると、どんな台風にも倒れない。）＜強調＞
tuinu ?amaniN kumaniN maicirasjuN.（鶏があそこにもここにも糞をやり散らす。）＜ならべ＞

(5) (N)kai 格

(N)kaiNの形である。標準語の「にも」に対応する。
?amaNkai ?icuru ci:deni kumaNkaiN migure:ja:.
（あそこに行くついでにここにもまわってね。）＜つけくわえ＞
Nme:ja mimajuNkaiN siragi mi:tuN.（祖父は眉毛にも白髪が生えている。）＜つけくわえ＞
N̥ni hja:garaci NmiNkaiN ?ikaraN.（舟を干上がらせて漁にも行けない。）＜強調＞
misitanu c'uNkaiN ciburu sagi:N.（目下の人にも頭をさげる。）＜強調＞
?aNma:Nkai taqkwati ta:NkaiN dakaraN.（お母さんにくっついて誰にも抱かれない。）＜強調＞

(6) kara 格

karaNの形である。標準語の「からも」、「も」（移り動く場所）に対応する。
taiwaNbo:ja sa:zikaraN ?uci:N.（タイワンハゲは手ぬぐいからもうつる。）＜強調＞
?i:za:ja hukibaNtakaraN ?aqcuN.（山羊は断崖(カラ)も歩く。）＜強調＞
tarizi:ja kiNnu ?wi:karaN wakaiN.（垂れ乳は着物の上からもわかる。）＜強調＞

(7) tu 格

tuNの形である。標準語の「とも」に対応する。
takukunu c'utuN wadaN sjuN.（他国の人とも仲良くする。）＜つけくわえ＞

(8) madi 格

madiNの形である。標準語の「までも」に対応する。
?unu kuto: ma:madiN sirabiraN ?are: naraN.
（そのことはどこまでも調べなければならない。）＜強調＞
?icimadiN mama naraja:.（いつまでも一緒にいようね。）＜強調＞

とりたて助詞 N は標準語の「さえ」の意味に対応してももちいられる。

wa:gaN te:ge:ja siqcuN.（私(ガ)さえだいたいは知っている。）
ʔarigaN nama: maniNgiN natuN.（彼(ガ)さえ今は真人間になっている。）
taiwanNmuja tusijuinuN ma:saN.（台湾芋は年寄り(ガ)さえおいしい。）

1．3　ju:ka のとりたて

標準語の「より」に対応する形で、首里方言では jaka, juka の形でもちいられる。ふたつのものを比較するとき、その基準をあらわす。

to:gimimucija kumimuciju:ka ma:saN.（唐黍餅は米餅よりおいしい。）
ʔamanu mikataja kumaju:ka ʔu:saN.（あそこの味方はここより多い。）
waNja ʔariju:ka he:sa Nmaritan.（私は彼より先に生まれた。）
ʔunu N̥ne: ʔariju:ka mi:saN.（その船はあれより新しい。）
ʔijunu tuidakaja me:nucikiju:ka waqsaN.（魚の漁獲高は先月より悪い。）
ʔumudakija ʔu:dakiju:ka takasaN.（オモ岳は大岳より高い。）
takahataja zi:bataju:ka daku jaN.（高機は地機より楽だ。）
ʔitakubiju:ka dakikubija curasaN.（板壁より竹壁は美しい。）
hujunu hi:saju:ka nacinu ʔacisaja husigaraN.（冬の寒さより夏の暑さは耐えられない。）

疑問詞にくっついて「全部のなかでいちばん」という意味になる。

kinu: cu:nu hi:saja ʔiciju:ka cu:saN.（きのうきょうの寒さはいつよりも強い。）
ta:ju:ka ʔicibaN nati huqkitunugacaN.（誰よりも一番になって走りとおした。）
ʔanu c'uja ta:ju:ka tacimasatuN.（あの人は誰よりたち勝っている。）
huruco:ja nu:ju:ka te:sicina muN jaN.（古い文書はなによりも大切なものだ。）
na:be:ra:Nbusi:ja nu:ju:ka ma:saN.（へちま煮はなによりもおいしい。）

1．4　baka:i のとりたて

標準語の「ばかり」「だけ」に対応する形で、首里方言では bika:N, bike:i, bike:N で用いられる[3]。他のものから限定することをあらわす。

me:nici kunu kiNbaka:i kici huruku nasjuN.（毎日、この着物ばかり着て古くする。）
maja:nu ja:ʔuci:to: 'inumuN ja:ʔuci:baka:i sjuN.（猫のひっこしと同様、ひっこしばかりする。）
hizu: c'unu ja:baka:i migutuN.（しょっちゅうよその家ばかりまわっている。）
muNgusamikibaka:i sjuru c'uja sikaraN.（いらいらする事ばかりする人は嫌いだ。）
c'unu me:bibaka:i se: ti:ja ʔagaraN.（人の真似ばかりしては技は上達しない。）
miqciʔamaja:ga ʔi:se: kucisakibaka:i.（才走った者が言うのは口先ばかり。）
pakupaku tabakubaka:i hucuN.（プカプカタバコばかりすっている。）

標準語の「だけ」の意味にも対応してもちいられる。

kazinu ʔakutu huNbubaka:i ʔagi:N.（風があるから、本帆だけ上げる。）
simaja takazaNbaka:i ʔaN.（島は高山だけある。）
mizi ʔare:baka:i se: ʔakaja ʔutiraN.（水洗いだけしては垢は落ちない。）

1．5　co:Nのとりたて

標準語の「さえ」に対応する形である。極端なことをあげて強調し、意外さをあらわす。用例はすこししかみつかっていない。渡名喜島方言ではとりたて助詞Nが標準語の「さえ」の意味にも対応しているようである（2．2　Nの項参照）。

ʔanu se:kuno:co:N mucikasa sjuN.（あの大工がさえ難しがっている。）
sisi c'ukiriNco:N kuraN.（肉を一切れさえくれない。）

1．6　du のとりたて

日本語古代語の係り助詞「ぞ」に対応する形である。述語との呼応関係があり、基本的に連体形で結ぶ。強調の意味をあらわす。標準語では「しか＋否定形」に訳すことができるばあいがある。

・gumasaine: ciza:haza:nu kiNdu kicaru.
（小さい頃には継ぎはぎの着物を(ゾ)着たのだ。／着物しか着なかった。）
・ʔure: ʔja:gadu nairu.（それはおまえが(ゾ)できるのだ。／おまえしかできない。）

(1)　はだか格

waqta:ja kunu k'wadu mi:ʔati jaru.（私たちはこの子が(ゾ)目標なのだ。）
hjakusjo:ja ki:nu gi:hja:du sasari:ru.（平民は木のかんざしを(ゾ)挿せるのだ。）
ʔja:ga mi:macige:du jati ʔaru.（おまえが見間違え(ゾ)だったんだ。）
ʔunu c'uto: miNdasibire:du nairu.（その人とは表面のつきあいが(ゾ)できるのだ。）
jukunamuNja du:nu me:du nu:ru.（欲張りは自分のまえを(ゾ)見るのだ。）

(2)　ga 格

ʔarigadu ʔi:taru.（彼が(ゾ)言ったのだ。）
ʔaNgutu ʔaru hati:gadu sizimi:u:sjuru.（あのように大胆者が(ゾ)治められるのだ。）
ʔwe:kigadu zurija cimi:ru.（金持ちが(ゾ)女郎は買いきるのだ。）

(3)　nu 格

muNgumasaru c'unudu ziNgami:ja nairu.（几帳面な人が(ゾ)金銭の取り扱いはできるのだ。）
jurunu ʔanu micija muNʔuzi: saN c'unudu ʔaqkiu:sjuru.
（夜のあの道は物怖じしない人が(ゾ)歩けるのだ。）
kunu siwazaja munuN wakaraN muNnudu si ʔaru.
（このしわざはものもわからない者が(ゾ)してあるのだ。）
te:huja:ja Nnasikinudu nairu.（松明振りは綱好きが(ゾ)できるのだ。）

(4)　ni 格

Nkasija sjo:gwacinidu mi:giNja ki:taru.（昔は正月に(ゾ)新しい着物は着たのだ。）
Nminu hukainidu magiʔijuja 'uru.（海の深いところに(ゾ)大きい魚はいるのだ。）
ʔunu micija c'utut'atunidu nairu.（その道は一、二年に(ゾ)できるのだ。）
haqsiNnu zu:bakuja ʔwe:kija:nidu ʔaru.（八寸の重箱は金持ちの家に(ゾ)あるのだ。）

(5)　kara 格
tikugukaradu ducide:N nairu.（書記から(ゾ)地頭代にもなれるのだ。）
hujo:zo:karadu bjo:cija ʔukuri:ru.（不養生から(ゾ)病気はおきるのだ。）

(6)　si 格
to:hubuqkuja kumasaru nuNsidu nairu.（豆腐袋は目の細かい布で(ゾ)できるのだ。）
ki:nuʔananu ʔaNdaja sahuNsidu ʔuti:ru.（毛穴の脂は石鹸で(ゾ)落ちるのだ。）
du:nu niNrikisidu jaNme:ja no:sjuru.（自分の精神力で(ゾ)病気は治すのだ。）

以下のように述語に終助詞がつくばあいは、述語は連体形にならない。また、そうでないばあいにも述語との呼応関係がみられない例もみられた。
ʔure: namadu jaNna.（それは生で(ゾ)あるか。）
zicija 'i:busjasiga zite:gwa:du sjuNde.（実はもらいたいけど辞退を(ゾ)しているよ。）
ziNto: ʔarigadu sjagaja.（ほんとに彼が(ゾ)したのだろうか。）
nama jatiN tacikaNdi:du jaru hu:zi jaqsa:.（今でも苦しい生活で(ゾ)あるようだなあ。）

ʔanu ʔikusa mukurudasidu miqkwasaN.（あの戦をもくろんだ者が(ゾ)憎い。）
c'unu du:ja muNsidu cikurari:N.（人の体は食物で(ゾ)作られるのだ。）
ʔja:nare:du hukanare:.（家の習慣が(ゾ)外での習いだ。）

1. 7　ga のとりたて
日本語古代語の係り助詞「か」に対応する形である。述語は - ra 形式（いわゆる「未然形」）で結ばれる。おおく疑問をあらわす語にくっつき強調する。さらに述語とむすびついて、推量の意味をあらわす。
huju: si:ne: naNniciga kakaira wakaraN.（不精すると何日(ガ)かかるだろうかわからない。）
ma:sakaza sjusiga nu:ga siko:ira.（おいしい匂いがするが、何を(ガ)つくっているのだろうか。）
namaguro: ma: maNguraga Nzura.（今頃はどのあたりに(ガ)行っているだろうか。）
wa:ga maNtaʔuci sjuru ʔe:dani ma:kaiga natara.
（私がまばたきするあいだにどこに(ガ)なったのだろうか。）
ma:karaga kicura mimibe:saN.（どこから(ガ)聞くのだろうか、聞きつけるのが早い。）
zira:ja cikaguro: miciraniN mi:raNsiga tabikaiga Nzara.
（次郎は近頃は姿にも見えないが、旅に(ガ)行ったのだろうか。）

渡名喜島方言では「～ ga ＋ jara」のくみあわせが固定化し、音声的に融合した ge:ra の形が頻繁にもちいられる。「(であるの) だろうか」の意味をあらわす。
tabi'utaige:ra nama niNtuN.（旅疲れだろうか、まだ寝ている。）
cibjo:ge:ra turubaika:bai sjuN.（気の病だろうか、ぼんやりしている。）
nu:ge:ra mi:kuragai si kimu tuja:saraN.（なんだろうか、めまいがして心が落ち着かない。）
guhusini janusiga nu: bjo:cige:ra.（くるぶしが痛むが何の病気だろうか。）

2. 終助詞

文のおわりにくっついて、話し手のきもちをあらわす。
渡名喜島方言の終助詞はつたえる形として、jo(:), do:, sa, qsa:, ja(:), de, te(:), muN, hja:, gaja(:), cisa が、また、たずねる形として、ga, na が確認できた。

2. 1 jo(:)

標準語の「よ」に対応する。

(1) いいきりの形（いわゆる「終止形」）＋ jo(:)
話し手ができごとを聞き手につたえ、念押しする。

sju:ja k'waburimuN jakutu 'irimuN ko:ti cu:Njo.
（父さんは子煩悩だから、おもちゃを買ってくるよ。）
ʔaN ʔaru hazikira:ga: mata cu:Njo.（あんな恥知らず(ガ)は、また来るよ。）
zo:i ʔariga: saNjo.（けっして彼(ガ)はしないよ。）
ʔunu mi:sarimuNno: nama se:ne:Njo.（その怠け者(ガ)はまだしていないよ。）

(2) 命令形＋ jo(:)

聞き手に対するうながしややさしい要求をあらわす。

hitimitiza:N nudikara harukai ʔikijo:.（朝のお茶も飲んでから、畑に行きなさいよ。）
kure: tanumarimuN jakutu maciga:N gutu sijo:.
（これは頼まれ物だから、まちがわないようにしなさいよ。）
ke:iginja tatu:i muqturijo:.（着替えは二通り持っていなさいよ。）
namanu sikuci cigakiti sijo:.（今の仕事を精出してしなさいよ。）
ʔimiʔucija cikisimijo:.（忌中は物忌みしなさいよ。）
ʔunu hi:ne: zihi ku:jo:.（その日には必ずおいでよ。）
c'uta:gunu mi: mizi kuminci ʔukijo:.（水桶のいっぱい、水をくんでおけよ。）
ʔiqsjudakinu hagamasi takijo:.（一升炊きのはがまで炊きなさいよ。）

形容詞の名詞形にくっついて、詠嘆をあらわす例もみられた。

cicu:nu Nminu curasajo.（月夜の海の美しさよ／美しいことよ。）
ʔunu 'uduinu tihuinu curasajo:.（その踊りの手振りの美しさよ／美しいことよ。）

2. 2 do:

いいきりの形（終止形）につき、話し手の強い意志、判断を聞き手に主張する。標準語の「ぞ」「よ」に対応する。ただし、標準語の「ぞ」は男性が使用するが、渡名喜島方言の do: は、男性、女性に関係なく使用され、大人が子どもを叱るとき、聞き手に注意をうながすときなどによくもちいられる。

nacuru warabe: mimi ki:Ndo:.（泣く子は耳を切るぞ。）
wanuNkai taqkurusari:Ndo:.（私になぐられるぞ。）
ci:ci: sa:raNdo:.（火をさわらないよ。）
higasa sasaN ʔare: hi:jaki sjuNdo:.（日傘を差さなければ、日焼けをするよ。）
hanasaca:naminu Nzitukutu te:huja cu:Ndo:.（白波が出ているから、台風は来るよ。）
cikizi: si:ne: mizija niNgwi:Ndo:.（釣瓶を上下に動かすと、水は濁るぞ。）

nabituisi nabi ʔurusaɴ ʔare: ti: sɪɴdasjuɴdo:. （鍋つかみで鍋を下ろさないと手をすべらせるよ。）
ʔare: ca: cu:ɴdo:. （彼はいつも来るよ。）
nacinu kusanumi:ne: habunu 'uɴdo:. （夏の草むらにはハブがいるよ。）
kumaniɴ ʔunu ti:ja ʔaɴdo:. （ここにもその手はあるぞ。）
ʔaɴma:ja namato: ku:ɴdo:. （お母さんはしばらくは来ないよ。）
cacawaɴza:ja numuru muno: ʔaraɴdo:. （一杯茶は飲むものではないよ。）
c'unukiʔwi:bisi c'u sasjuse: ʔaraɴdo:. （ひとさし指で人を指すものではないよ。）
'inagunu ja:sikucija ca: tacikuɴpai de:ɴdo:. （女の家事はいつも立ちっぱなしだよ。）
namaja tatuibanasi: de:taɴdo:. （今はたとえ話であったよ。）
kukurunu mucinasidu de:ʔicido:. （心の持ち方が第一なのだよ。）
kamiʔugamija na:ja:ɴdo:. （神拝みは再来年だよ。）
kure: wa: nasakido:. （これは私の情けだよ。）

do: の後にさらに ja: をつけた形ももちいられる。
wa: nasakinu tisazido:ja:. （私の愛のこもった手ぬぐいだよ。）

2. 3　sa

話し手の意志、意見、判断などを表明する。述語が肯定形のばあいは「短縮形(apocpated form)」[4]につき、否定形のばあいはいいきりの形につく。標準語の「よ」「さ」「な」に対応する。
ʔaɴ ʔaru narihuzi si c'uni misimuɴ sari:sa. （あんな身なりをして、人に見世物にされるよ。）
ɲni ɴzaci muduiru micisigara ʔiqta: ja:kai co:sa. （船を見送って戻る道すがらお前の家に来たよ。）
musi ʔja:ga si:jaɴzi:ne: wa:ga sjusa. （もしお前が仕損じたら、私がするよ。）
ʔuqkanu mucime:ja haraibiki jasa. （負債の負担分は払うべきだよ。）
ʔariga tasime:ja wa:ga ɴzasusa. （彼の立替は私が出すよ。）
ʔuɴnaginu na:se: cinagaisa. （その長さの縄ではつながるよ。）
jakusiku sakutu zihi cu:sa. （約束をしたから、かならず来るよ。）
ʔunu kutuɴ hikazinu taci:ne: waqsi:sa. （そのことも日数がたつと忘れるよ。）
ʔunu kuto: ʔujanu hikari naisa. （そのことは親の名誉になるよ。）
ʔaqta:ja cu:go: sjuti ʔasa. （彼らは相談してあるよ。）
c'ugaranu jutasakutu ʔataisa. （人柄がいいから、当選するよ。）
warabiɴ magi: natakutu dikuci kwaisa. （子どもも大きくなったから、理屈をこねるよ。）
ʔamakaranu ke:ini juisa. （あそこからの帰りに寄るよ。）
sitai ju: cibatasa. （したり、よくがんばったな。）
ʔja:ja kuɴdaqturu ganito: 'inumuɴ ma:kaiɴ ʔikaraɴsa.
（おまえは縛られている蟹と同じでどこにも行けないさ。）
misimisi:tu ʔja:ne: kuraɴsa. （みすみすおまえにはやらないよ。）

sa の後ろにさらに ja: のついた形ももちいられる。
ma:i sikara tanaɴka natasaja. （亡くなってから十四日になったね。）
na:madi ti:wacare: simi:saja. （あなたまで面倒をかけるね。）

ʔeːhjaː ʔjaːgadu nusideːsaja.（おいこら、おまえが(ゾ)盗んであるな。）

2. 4　qsaː

話し手の直接的な感情の表明である。ひとりごとのばあいもある。述語の「短縮形(apocpated form)」につく。否定形のばあいはいいきりの形につく。標準語では「なあ」「ねえ」に対応する。

ʔunu hiNzini sasicimataqsaː.（その返事に窮してしまったなあ。）
tanariN neːN sikuci sjuqsaː.（器用でない仕事をするものだねえ。）
nama jatiN tacikaNdiːdu jaru huːzi jaqsaː.（今でも苦しい生活で(ゾ)あるようだなあ。）
daNzu ʔutu Nzuturu curaː jaqsaː.（なるほど音に聞こえた美人だなあ。）
harusjuːbuni makiti zaNniN jaqsaː.（原勝負に負けて残念だなあ。）
ʔamanu jumija hataracaː jaqsaː.（あそこの嫁は働き者だなあ。）
ʔunu baːnu duqcija nama nugiraNsaː.（そのときの毒気はまだぬけないなあ。）

2. 5　ja(ː)

(1)　いいきりの形＋ jaː

聞き手が話し手に同意をもとめたり、念押しをしたりする。

miːdusa ʔataNjaː.（久しぶりでしたね。）
ʔjaːja waN nasagaracaNjaː.（おまえは私をけなしたね。）
ʔjaːtu ʔicatikara nageːsaNjaː.（おまえと出会ってから久しいね。）

(2)　意志形＋ ja(ː) [5]

①ともにすることをさそいかけ、同意をもとめる。

ʔicimadiN mama narajaː.（いつまでも一緒にいようね。）
cuːja ʔunukutu cuːgoː saja.（今日はそのことを協議しようね。）
maNna ciriti ʔikaja.（一緒に連れていこうね。）
sjoːgwacineː kuːruː maːci ʔasibaja.（正月にはこまを回して遊ぼうね。）

②話し手が自分の動作、判断について、同意をもとめる。

waNja saki naraja.（私は先になるね。）
meːmeː kuraja.（ご飯をやるね。）
haiNmanu kiqcakitaNganeː jasaja.（駿馬がつまずいたようだね。）

(3)　命令形＋ jaː

聞き手に命令することを念押しする。

ʔamaNkai ʔicuru ciːdeni kumaNkaiN migureːjaː.（あそこに行くついでにここにもまわってね。）

係り助詞 ga の結びである- ra 形式にくっついても用いられ、同意をもとめる。

caNgutuga ʔuqsjarajaː.（どんなにか嬉しいだろうね。）

jo:ja: の形でももちいられる。
waqta:kaiN miguimigui ku:jo:ja:.（うちにもどきどき回っておいでよね。）

2. 6　de
いいきりの形につく。話し手が確認した現在の状態を表明する。標準語の「さ」「よ」に対応する。
zicija 'i:busjasiga zite:gwa:du sjuNde.（実はもらいたいけど辞退(ゾ)しているよ。）
namanu sikucija kucitu to:kaki de:Nde.（今の仕事はやっと食えるだけだよ。）
?are: nama ke:ti cu:ru hazide.（彼はもうすぐ帰ってくるだろうよ。）

2. 7　te(:)
いいきりの形につく。推量してつたえる。標準語の「だろうさ」「だろうよ」に対応する。
to: namaja sa:nai ?aqcuNte:.（さあ、いまは勢いよく歩くだろうよ。）
kiNbaka:i ko:tuine: ki:do:ri sjuNte.（着物ばかり買っていると、着倒れするだろうさ。）
tara: tuzi nati bacikwai jaNte.（太郎の妻になってすばらしいことだろうさ。）
?unu kutuja siNbuNni nuiNte.（そのことは新聞に載るだろうさ。）
?are: namaguruja hucukuru?o:gime: sjuNte.
（彼は今頃は人知れず喜んでいるだろうさ。）
?aN ?aru kisjo: muqcuine: nana?ukama: naiNte.
（あんな気性を持っていると、七つの火の神を拝む者になるだろうさ。）
kunu warabe: ta:cimaca: jakutu hasiko:muNte.
（この子はつむじがふたつ巻きだから、気が荒いだろうさ。）
?aritu kuri jare: tiNtu zi: de:Nte.（あれとこれであれば、天と地であるだろうさ。）
?unu kutu kikima:ine: de:zite.（そのことを聞きまわったら大変さ。）

2. 8　muN
連体形につく。標準語の「さ」に対応するようである。用例がすくない。
ke:te: ?aN sjutasidu masi jatarumuN.（かえってああしたほうがよかったさ。）
ho:hoi ti: kiqcarumuN.（そらみろ、手を切ってしまったさ。）
sizin ?aN nati ne:Nmun.（自然にそうなってしまったさ。）

2. 9　hja:
ののしる意味にもちいられる。用例がすくない。
nu:gahja: ?ja:ga kamuibiki: de:mi.（なんだ、おまえが関わるべきであるか。）
nu:ci:Nhja:.（なんと言いやがるか。）
sitaihja: namanu gutu jasa.（そらみろ、いまのようにだよ。）

2. 10　gaja(:)

疑問詞たずねの終助詞 ga にさらに念押しの意味をあらわす ja(:) がついた形である。肯定形のばあいは「短縮形」につき、否定形のばあいはいいきりの形につく。推量してのべる。標準語の「だろうか」「かしら」に対応するようである。

kunu do:guja ʔicimadi mucugaja:.（この道具はいつまでもつだろうか。）
zu:guja:zicu:ja cu:ja mirari:gaja.（十五夜の月は今日は見られるだろうか。）
kwi:N kikari:gaja.（便りもきこえるだろうか。）
ʔaritu ʔicatase: canuba: jatagaja.（彼と会ったのはどんな場合だったかなあ。）
ʔanu ja:ja c'unu tacike:ʔirike: sjusiga nu: jagaja:.
（あの家は人が入れ替わり立ち替わりするが何だろうか。）
mataʔicukukara: taniN de:gaja.（またいとこからは他人だろうか。）
ʔure: tasikana kutu de:gaja.（それはたしかな事だろうか。）
he:ma:i sjusiga jaNdiraNgaja.（風向きが南回りになったが、（天気が）くずれないかしら。）
kazinu bu:bu: sjusiga ʔarasinu ku:Ngaja.（風がびゅうびゅう吹いているが、嵐がこないだろうか。）

wa: ʔasizatu tuicige:tuse: ta:gaja.（私の下駄と取り違えているのは誰だろうか。）

2. 11　cisa

引用の助詞 ci に、さらに終助詞 sa がついた形である。伝え聞いたことや昔から言い伝えられていることをあらわす。標準語の「と言うよ」「とさ」「そうだ」と対応する。

Nmagaja tataNze:ku nataNcisa.（孫は畳職人になったそうだ。）
tara:ja he:riqsiN sjaNcisa.（太郎は早出世したそうだ。）
cikaguru t'aija ni:biki sjuNcisa.（近々二人は結婚をするそうだ。）
ʔanu c'uja gumasaini kumi'udui sjaNcisa.
（あの人は幼少の頃に組踊りを演じたそうだ。）
ha:ri:ganinu naine: nagaʔamiN ʔuwaicisa.
（爬竜船競争の鉦がなると、梅雨もあけるとさ。）
habe:ru:ja gusjo:nu cike:muNcisa.（蝶はあの世の使者だそうだ。）
bi:ca:nu ʔwi:kai ʔagaine: hiNci naiNcisa.
（モグラが床の上にあがると異変がおこるそうだ。）

2. 12　ga

疑問詞をともなう、たずねる文にもちいられる。述語の「短縮形」につく。標準語の「か」に対応する。

na:ja ma:kai moi:ga.（あなたはどこにいらっしゃいますか。）
ʔare: ma:nu c'u jaga.（彼はどこの人であるか。）
ʔicinu mi:ni cicaga.（いつの間に着いたか。）
jasikinu cibusu:ja caqsa ʔaga.（屋敷の坪数はいくらあるか。）
mi:du:sanu ma: Nzutaga.（ひさしぶりだが、どこに行っていたか。）
ʔja:ja canuʔatai ʔwi:giu:sjuga.（君はどのくらい泳げるか。）

caqpi ʔare: taiga.（どれだけあれば足りるか。）
kinu:nu ʔacimaini nannin ʔacimataga.（きのうの集まりに何人集まったか。）
cikaguro: nu:ga ku:nga.（最近はどうして来ないか。）

ʔunu sinamunja zinidakaja caqsaga.（その品物は金額はいくらか。）
kunu bo:sija ta:munga.（この帽子は誰のものか。）

2. 13　na

疑問詞をともなわないたずねる文の文末につく。標準語の「か」に対応する。

(1)　いいきりの形＋ na

たずねる文をあらわす。

ci:ja ʔe:inna.（乳は出るか。）
zin tuna:ja karaci kuranna.（お金、二十銭は貸してくれないか。）
t'ainuʔujaja ʔuganzu: janna.（両親はお元気ですか。）
hanagwi: sjusiga hanasiki de:nna.（鼻声をしているが、風邪であるのか。）
cu:nu tigaraja ʔuqsana.（今日の収穫はこれだけか。）

反語の意味、また難詰の意味でもちいる。

siqtaidu:nkai kin ki:nna.（濡れた体に着物を着るか。）
kunu sikucija ta:gan ta:gan nain cidu ʔumuinna.（この仕事は誰でもできると思うか。）
nu:cin ʔire: simunna.（なんとでも言えばいいのか。）
c'uʔatukara ʔike: ko:iu:sjunna.（人の後から行けば、買えるか。）
c'uisin nairumun wanmadi ti:wazire: simi:nna.
（ひとりでもできるのに、私まで手わずらいさせるのか。）
wanja ʔariga cibinuguja: de:nna.（私は彼の尻拭い役であるか。）

(2)　連用形＋ na

過去のことをたずねるときに、この形がもちいられる。

jurunu nmikaija cirin 'utina.（夜の漁には連れもいたか。）
kataminu sina de:tarumun misinata:ku ne:nnacina.
（形見の品だったのに、残念にも失くしてしまったのか。）
ʔan ʔaru nami ʔarasaru nmi watati cina.（あんな波の荒い海を渡ってきたのか。）
ju:we:nu kwaqci:ja kwahusukuja ne:n ʔatina.（お祝いのご馳走は過不足はなかったか。）
samani ʔicaru kutu jasiga waqsitina.（しらふで言ったことなのに、忘れたのか。）
ʔure: c'unu munja ʔaranna.（それは他人の物ではないか。）

(3)　述語の「短縮形」につく。

禁止の意味をあらわす。標準語の「な」に対応する。

sanmuju:si jaru hu:zi jakutu ma:nkain ʔikuna.（産気づいているようだから、どこにも行くな。）
tandi ʔan ʔaru kuto: se:kunna.（どうかあんなことはしないでくれるな。）

(4) 意志形＋ na

話し手が自分の希望をのべ、聞き手にさそいかける。標準語の「しようよ」「したい」に対応する。

cicamici tu:ti ʔikana.（近道を通って行こうよ／行きたい。）
zu:gujanu cikinagami sana.（十五夜の月眺めをしようよ／したい。）
mata tikakiti ɴdana.（また、やり始めてみようか／やり始めたい。）
ha:ri: kiɴbucikai ʔikana.（ハーリーを見物に行こうよ／行きたい。）
di: sikuci hazimirana.（さあ、仕事を始めようよ／始めたい。）

3. 引用の助詞

ci（と）、cici（と言って）の形がある。cici の方が用例は多い。標準語の「と」「しようと（して）」「するために」に対応する。首里方言ではɴdi（と）、ɴdici（と言って）の形がもちいられている。

3. 1 ci

ciza:sjaru kiɴja jaribuka:ci ʔiɴ.（継ぎ合わせた着物はヤリブカーと言う。）
ʔunu c'uja du:nu zi:du zi: jaruci ʔumuikunuɴ.（その人は自分の正義が正義であると思い込む。）
caɴnage: maqcutaɴci ʔumuiga.（どれだけ待っていたと思うか。）
ʔisjaja gaɴ jaɴci mitati:ɴ.（医者は癌だと診断する。）
warabija ci: nunuɴci musjo: naiɴ.（子どもは乳を飲もうと夢中になる。）
taku kacimiraɴci sjakutu buqtikaci ʔanaɴkai ʔiqcaɴ.
（蛸をつかもうとしたら、ブッと穴に入った。）
gazaɴ hiɴgasjuɴci maciba: kiburasjuɴ.（蚊を追い払うために松葉を焚いて煙らせる。）

ci にさらに ɴ がくっついた形 ciɴ「とも」もある。

rukugwacikasiki:ja haciziqkuciɴ ʔi:ɴ.（六月のカシキー折目は初節句とも言う。）
niqcunu kuto: ʔu:guru:ciɴ ʔi:ɴ.（ニッチュのことはウーグルーとも言う。）
na:kaɴge:kaɴge:nu ʔakutu nu:ciɴ ʔiraraɴ.（それぞれの考えがあるから、なんとも言えない。）

3. 2 cici

ʔaqta: ja:ja ma:jagacici kicuɴ.（彼らの家はどこかと、聞く。）
ʔatataru husjo:cici ʔakirami:ɴ.（当たったのも不運と、あきらめる。）
"haijasiqsi" cici he:si ʔiqtaɴ.（「ハイヤシッシ」と囃子をいれた。）
"cikinu haija ɴmanu hai" cici cikihinu ʔicuse: he:saɴ.
（「月の経つのは馬の走り」と言って月日の経つのは早い。）
watanu januɴcici ke:riɴkurubiɴ sjuɴ.（腹が痛むと言って、転げまわっている。）
sikucinu ʔaɴcici ɴzaɴ.（仕事があると言って行った。）
waɴ suguiɴcici bo: hikima:sjutaɴ.（私を殴ろうと、棒を構えた。）
ʔari nadami:ɴcici sikwa:caɴ.（彼をなだめようとして困りはてた。）
ko:ihaɴsiga sjuracici hutuhutu sjaɴ.（買いそこねはしないかとあせった。）

mani?a:raNga ?aracici huqkicaN.（間に合わないかと（思って）、走った。）
?ica?wi:ba cikuiNcici ki: hizuN.（いか疑似餌を作るために、木を削る。）
hudu ?wi:Ncici hudu?wi:guruinu januN.（成長するために、股のぐりぐりが痛む。）
kwaqci: siko:iNcici hizu: tacidu:si jataN.（ご馳走を準備するために、一日中立ちどおしだった。）
warabituna ?acikaiNcici kucikarazi janusa.（子ども達を叱るために、口も頭も痛むよ。）

おわりに

この報告は『渡名喜島方言辞典』を編集するうえで、見出し語の用例の検討と名詞の文法的な意味の記述をする必要から、分類、記述を試みたものである。とりあげた用例は、辞典の筆者であり、渡名喜島出身者の比嘉松吉さん（明治41年生）が作成したものである。

用例は音韻表記である。音声との対応がわかるよう、本稿の末尾に音節一覧表を掲げた。(6)

注

(1) 渡名喜島方言の格助詞については、高江洲2003を参照されたい。

(2) 琉球方言を基盤として話される標準語は、「ウチナーヤマトゥグチ」と呼ばれるが、とりたてに関しても方言のこの影響をうけていて、「私がはしなかった。」のような言い方がされる。

(3) わずかに bike:N, bike: の形の使用がみられた。他の中南部方言からの影響が考えられる。
?unu kutubike:N muN?umi:ci:N.（その事ばかり思いつめる。）
waqta:bike: ?imasimisi hatarakasjuN.（私たちばかりいじめて働かせる。）
hitani ?unu kutubike: ?i:ke:sja: sjuN.（いつもそのことばかり言い返ししている。）

(4) 「短縮形（apocpated form）」とは、たとえば、動詞のいいきりの形 sjuN（する）のNをとった形である。この用語は『沖縄語辞典』によっている。

(5) 標準語では①と②は同じ形式ではもちいられないが、琉球方言では①、②ともに形式が同じであるため、ウチナーヤマトゥグチでも両方の意味で「～しようね」の形をもちいる。5時に帰ろうね。（いっしょに帰ろうね／（私は）帰るね。）

(6) 渡名喜島方言の音韻については、高江洲2002を参照されたい。

参考文献

上村幸雄　1992　「琉球列島の言語（総説）」『言語学大辞典　第４巻』三省堂
生塩睦子　2002　「沖縄伊江島方言のとりたて助詞」『環太平洋の言語』成果報告書 A4-019
国立国語研究所　1969　『沖縄語辞典』国立国語研究所
鈴木重幸　1972　『日本語文法・形態論』むぎ書房
高江洲頼子　2002　「渡名喜島方言の音韻」『環太平洋の言語』成果報告書 A4-019
高江洲頼子　2003　「渡名喜島方言における格助詞の研究」『環太平洋の言語』成果報告書 A4-022
津波古敏子　1992　「琉球列島の言語（沖縄中南部方言）」『言語学大辞典　第４巻』三省堂
津波古敏子　2002　「屋我地方言の助詞の概観」『環太平洋の言語』成果報告書 A4-019

音節一覧表

/ʔi	ʔe	ʔa	ʔo	ʔu	ʔwi	ʔwe	ʔwa	ʔja/		
[ʔi	ʔe	ʔa	ʔo	ʔu	ʔwi	ʔwe	ʔwa	ʔja]		
/'i	'e	'a	'o	'u	wi	we	wa	ja	jo	ju/
[i ～ ji	e ～ je	a	o ～ wo	u ～ wu	wi	we	wa	ja	jo	ju]
/hi	he	ha	ho	hu			hwa	hja	hjo	hju/
[hi	he	ha	ho	hu			hwa	hja	hjo	hju]
/ki	ke	ka	ko	ku	kwi	kwe	kwa/			
[ki	ke	ka	ko	ku	kwi	kwe	kwa]			
				/k'u	k'wi	k'we	k'wa/			
				[k'u	k'wi	k'we	k'wa]			
/gi	ge	ga	go	gu		gwe	gwa/			
[gi	ge	ga	go	gu		gwe	gwa]			
/pi	pe	pa	po	pu						pju/
[p'i	p'e	p'a	p'o	p'u						pju]
/bi	be	ba	bo	bu					bjo	bju/
[bi	be	ba	bo	bu					bjo	bju]
/mi	me	ma	mo	mu				mja	mjo	mju/
[mi	me	ma	mo	mu				mja	mjo	mju]
/ti	te	ta	to	tu/						
[ti	te	ta	to	tu]						
/t'i	t'e	t'a	t'o/							
[t'i	t'e	t'a	t'o]							

/di	de	da	do	du/			
[di	de	da	do	du]			
/ni	ne	na	no	nu	nja	njo	/
[ni	ne	na	no	nu	nja	njo	]
/ri		ra	ro	ru/			
[ri		ra	ro	ru]			
/ci	ce	ca	co	cu/			
[ʧi	ʧe	ʧa	ʧo	ʧu]			
/c'i		c'a	c'o	c'u/			
[ʧ'i		ʧ'a	ʧ'o	ʧ'u]			
/zi	ze	za	zo	zu/			
[ʤi	ʤe	ʤa	ʤo	ʤu]			
/si	se	sa	so	su	sja	sjo	sju/
[ʃi	ʃe	sa	so	su	ʃa	ʃo	ʃu]

/N/　[m　n　ŋ　N]　　/ N̥ / [m̥　n̥]

(/q/[p　t　k　s　ʃ])

On the Particles of Tonakijima Dialect of Okinawa Islands

－ "*Toritate*" Particles, "*Shuu joshi*" (Sentence Particles), and Quotation Particles －

Yoriko TAKAESU

Abstract

The Tonakijima island is located in the west of mainland Okinawa about 58 km from Naha City with a 12.5 km in circumference. The Tonaki Island Dialect belongs to Okinawa Mid-South Dialect which is one of the eight dialect groups in the Northern Ryukyuan dialects (Amami-Okinawa dialect group).

This paper reports the result of the investigation on the "*toritate*" particles (ja, ɴ, ju:ka, baka:i, co:ɴ, du, ga), "*shuujoshi*" (sentence particles) (jo(:), do:, sa, qsa:, ja(:), de, te(:), muɴ, hja:, gaja(:), cisa, ga, na), and quotation particles (ci, cici). There have been some reports of the description of the case particles in the study of the particles of Ryukyuan dialects, but the studies of the "*toritate*" particles, "*shuu joshi*" (sentence particles), and quotation particles have not been yet well investigated . In this paper, the meanings and usage of these three particles are described based on materials of a pure-Tonakijima dialect speaker, and it will reveal the grammatical meaning and function including the structure of these three particles, and the phonetic fusion.

Key words: Tonakijima Dialect, particles, case particles, "Toritate" particles, the particles of "Kakari musubi" of the old Japanese